

世界紀行文学全集

17

アメリカ・カナダ

世界紀行文学全集

17

アメリカ・カナダ

—— 志賀直哉 ● 佐藤春夫 ● 川端康成 ● 小林秀雄 ● 井上靖

ほるふ出版

世界紀行文学全集 第十七卷

アメリカ・カナダ

監修

志賀直哉・佐藤春夫・川端康成・小林秀雄・井上靖

発行日

昭和五四年九月一日 発行

発行所

株式会社はるぶ出版

東京都新宿区新宿二十九十三 電話(〇三)三五四七〇三一(代)

代表 中森蒔人

総発売元

株式会社はるぶ

東京都新宿区新宿二十九十三 電話(〇三)三五六六二二一(代)

製作

東京連合印刷株式会社

目

次

中谷 宇吉郎
 中山 伊知郎
 湯川 秀樹
 今日 出海
 安倍 能成
 長与 善郎
 田中 耕太郎
 中川 一政
 福田 恆存
 中野 好夫
 吉川 幸次郎
 柳 宗悦
 大岡 昇平
 中屋 健一
 平林 たい子
 村松 梢風
 三島 由紀夫

北米雜記の七……………	三九二	北米雜記の八……………	三九三	黒い麦……………	三九四
北米雜記の九……………					三九四
アラスカ通信……………	三九五	ネバダ通信……………	三〇四	コロラド通信……………	三一
アメリカの一印象……………					三九
アメリカの春……………	三〇〇	ハドソン河畔の秋……………			三二
ハワイ雜感……………					三四
シャロツツウィルを訪う記……………					三七
「欲望という名の電車」の都市……………					三一
ニュー・オルリンズ……………					三四
ニューヨークの感謝祭……………					三四三
アメリカの自然と生活……………					三四五
アメリカ感傷旅行……………					三四九
アメリカと漢帝国……………					三五六
米国の旅……………					三六三
アメリカのシェイクスピア……………	三六〇	アメリカ退散……………	三七六	ピッツ……………	三六四
バークの一夜……………					三六七
アメリカかけずりある記……………					三九二
ニューヨークの黒人教会……………					三九二
アメリカ……………					三九四
ニューヨークの奇男奇女……………	三九六	アメリカ金持話……………	四〇四	ニュー……………	

池島 信平 ヨーク貧乏 四〇六
..... アメリカ雑誌 四一三

田中 耕太郎 カナダ 四二七
大宅 壮一 二十一世紀の国・カナダ 四三八

岡本 一平 画と文

陸だ！ 陸だ！ 画は最も判りよいエスペラント語である 二 あざらしの看板 三 ステーションに自然鯊
泉六 ジャズ米国余談 充 女房十九人 七 便所の酒の空壇 八 米国税関 二一 木目の研究がカムイン 二三
懐しき菜の花 二三 エレベーターの脱帽 二四 市俄高二五 ストックヤード屠殺場 二七 二八 ポトマック河の
桜 二五 裸の上院議員 二六 ワシントンの楡の木 二六 独立戦争遺蹟 二九 ビフテキの大きさ 一五 耳隠し、
短い裾、煙草 二五 加州移民の仮声 一五 自分の持物の代価を払う 一五 ナイヤガラ瀑 一九 一五 音楽入りの
靴 一七 縮緬屋さんの靴、後日譚 二九 旗の家と自由の鐘 二三 活動撮影場内の食堂 二三 豚滑り 三三 のん
き長兵衛 三三 「バクチアリマス」 三三 汽車を乗せる渡船 三六 とまり木とエスキモー・バイ 三二 コロラド
の平原 三四 神の庭 三六 風穴見物 三八 手の拵らえもの 三九 人間味のある万国旗 三三 ふんどし空 三三
建物づくし 二五 建物づくし 二五 三六 米国名物ホールド・アップ 三三 米国の寄席 三五 エピソード
三六 カフェテリアとオートマット 三六 文士村 三三 紐育ウオールド社の漫画室訪問上 四〇 同下 四三 自由
の女神 四三 大船の持腐れ 四五 最初に咲いた花 四三 町裏の焼木杭 四六
執筆者・出典一覧 四四

地 図 北アメリカ、合衆国東部、ニューヨーク、サンフランシスコ付近 巻末（折込）

北
ア
メ
リ
カ
編

桑港を中心として

片山 潜

それは明治十七年の十一月末か、十二月始め頃であつたらうか、サンパブロ^{サンパブロ}号が桑港の埠頭に錨を下ろすと、予は胸の高鳴るを覺えた。予の汚たならしい靴は、蹣跚として大陸の土を踏んだ。其の日の午後馬車でメソジストミッションに向つた。安からぬ大陸の第一夜。其のエム・イー・ミッションの印象は素晴らしく奇態なものであつた。ミッションは支那人ミッションの床下を借りて巢喰つて居た。宮川某が日本人の伝道師で、宮川は美しい妻君を鼻の先きに吊ら下げていた。広田、高木、辻某と呼ばれた男が、エム・イー・ミッションの首領株であつて、彼等は桑港に於ける日本人初期の移民上りであり、船乗りからモグリのに上陸したもののばかりで、広田の如きは祈禱の度毎に、自分の向上せる境遇を感謝して止まなかつた。そこで予に妙な感じを与えたことは信徒等が食事や祈禱会の賑いや教授を終つてからする祈禱そのものの怪しい声である。いかにもコンモンセンスの持ち合わせの無い人間かなぞのように、愚

にも付かぬ泣き事や、女々しい繰り言を、腹の底から絞り出すような奇声で訴える。恰度乞食が饑えを装うて門先きに立つたように、それも短ければまだ我慢もなるが、長々しくやられるので、予は笑うにも笑われず、こんなに困つた事は無い。当代の奇人根本正は屢々ミッションへやつてきた、予は根本正に日本語で話し掛けると、彼は英語で答えた。予には分らない、傍の日本人が通弁をしてくれたのでやつと分つたが、チト気が変らしいので、人に尋ねると、その人の返事が面白い。彼は英語自慢狂という奴サ、自分がホブキンス・アカデミーに居ることを自惚して吾れこそ英語の名人だからとて、英語ばかり使っていると云うことであつた。英語の解せない同胞の予に英語を使って得意がるとは、彼れもくだらぬ奇人かと予は思つた。

*

當時の予の境遇は寔に^{まこと}ブレカリオウスであつた、囊中一文も無い。例のメキシコ^{メキシコ}弗一個を両替して六十仙になつたが、之れは數日を出でずして遣かつた。矢野はその遠縁にあたる林某（當時桑港唯一の日本雜貨店『一番』に売り子を勤む）の世話で下宿に移つたが、予は二三週間桂庵に通ひ詰めたが、英語が分らぬので容易に口が出来ず、やつと十二月二十日になつて一週二弗五十仙の働きの口をさがして呉れたので、吉野という男に連れられて、吉野の通弁でとにかく住み込むことに決つた。当家は主婦と二三歳の少女と、下女の三人家内の二階住いであつた。頗る親切な人達で、下女は手真似足真似

で、踊るようにして、仕事を教え込んでくれた。食事も少女と同じときにつくつてくれた。予の仕事は皿を洗い、部屋の掃除をし、ウェーターをすることがすべてであつた。仕事も楽であり予は比処に満足した。由來我々が異境に彷徨うと言語が通じない、人情風俗に暗らいということから誰でも子供供しくなる。幼稚になる。殊に強く現れるのは依頼心の増長することである。之は故新島襄氏の伝（アルフツエス・ハーデー氏著）を読んでもよく分る。新島氏は船中でスタッキングスを洗えと命ぜられたので、その船員を一刀両断にせんと憤慨したということである。

氏がハーデー夫妻に救われてその家庭に住み、アンドウウウ^{アンドウウウ}に学びアムハーストに学ぶに及んで子供らしくなつたことが、其の通信書に依つて明らかに看取される。

*

予は二十五歳で、しかも岡鹿門の塾や森鷗村の塾に遊び、悲憤慷慨の士を以て任じ、『死を怖る者は共に談ずるに足らず』とか『生死是在天』と、泡を飛ばして壯語して來た丈けに、メキシコ弗一個で平然たるものであつた。しかし人間は境遇に支配される。環境は人を作る。新社会境遇に投げ込まれるとそこで新らしい衣着なければならぬ。さすがの予も紀州人田中鶴吉の甘言に乗せられて満足していた皿洗いを止めて暇をとつた。後で知つたことであるが、田中は予を出しおいて、その後自分の友人を住み込ませたのであつた。それが田中のスキーム

であった。その頃の事を予は、『渡米案内』という明治三十四年八月に出版した予の本に次ぎのように書いてある。

叔予は予の米国に於ける労働の小学を尚早に、而かも輕卒に退校して始めて離業者となる、それで再び美以教会に來り、一時衣食したが、一週間斗りすると、當時の賄方は頻りに食泊料の催促をなす、予は前日中儲けた金は上陸當時に当教会に借りたる食泊料に支払いたる故に、今や無一物となったが故に、此のマイザルの催促に堪えかねる労働者の会に行き其會長千葉某に事情を述べて金五弗を借り受け支払を済まして美以教会にグロッドバイを告げ、全く桑港ゴロツキ社会の仲間に入つた。

さて、数日此社会に出入して働き口を尋ね、一二の所に行くも追い出され、今や一銭の蓄えさへなく或日は、もう饑餓を感じ、止なく桂庵に居合せたる或る人に十仙を借りパンを買うて食し一時を凌いだ。幸に其日、一週三弗の所に行き働くこと三日目に不幸にも一種の熱病に罹つた、それが深夜の事として独り床内にありて生死覚束なきかと煩悶した、予が耶穌の神を求めたるは、此夜病床に在りし時を以て始めた、翌朝は働けないとして辞し去る、三日間の賃金を要求したが、桂庵に支払ひたる故を以て与えずと拒絶されて、又々路頭の人となつて、予は此時に始めて何かを悟つた。爾後は充分の成算なくしては、如何に困難なる働き口も之を去る可からず、如何に仕事に六力敷いとて、亦主人が不親切だとて、自己生活の成算なくては断じて現

在の地位を捨てる可からずと、是れが予がかかる困難に依つて、得たる玉条であつて、それを在米十三年間確守した。それが為め、当初の如く糊口に道なく饑餓に迫られたることは殆んどなかった。

金十仙のパン尚およく予の命を二日間支えた、けれども借り食いは継続すべからず、予は一カ月十弗で桑港より約四十哩ある、サンラフエルと云う、一小村の家塾の皿洗い、掃除番、塾僕兼給仕人となつて行つた。此塾には一人の先生（独身者）と一人の助教師でそれに十数人の生徒があつた。読者は予が此塾に入りたるを以つて、仕合と思ふだらうが、事實はそうでない。此塾のメルトン、兼下女及びクックなるギンナンと云える五十許りの婦人は実に予を奴隷の如く酷役したる婦人だ、朝は五時頃に呼び起し、夜は八時頃迄絶え間なく、労働をなさしめた。口の悪きことは無智の愚民を責むる悪役吏よりも酷だ、そして全く非理であつた、予は毎朝朝飯の用意を為し、当校舎の掃除、点火、冬なりし故に）をなし、尚お学生等の寢床を整え、歸つて朝飯のウェーターをなし、終つて皿洗い、室内の掃除及び洗濯をなす、尚お時には大掃除を為し又窓を拭く、終日一分時間も休息する暇もない、予は無情無慈なる羅刹惡魔のような彼女を思い浮べるとき思はず慄とする、だがその時より遙かに困難なる、而かも激烈なる仕事を為したことがある、しかし此家塾に於ての如く、残酷味を覚えたことはない、予は此処に働くこと二カ月にして（當時イサカのコレネ

ル大学に居つた岩崎清吉から予を激励する一書を受取つた）意を決して再び桑港に歸つたのであつた。歸桑して桂庵に行けば、一週三弗半の働き口があつた、それは桑港下町の片端にあつた大工の老棟梁の家、アイランド人の家庭であつた。

*

この家族は富めるにあらざるも、安楽に暮らして、予に対してはなかなかの親切をつくしてくる。彼のサンラフエルにて鬼婆に使われたる後であつたから予はこの家庭に満足して八カ月間労働して、渡米の際借金したる金額を悉皆支払い、尚お一着の古服をさえ求めた。（予は記憶す、當時矢野美造に支払ひたる二十五弗は殆んど倍額の日本金二十五円に當りたるを）。然るに予が渡米當時、少なからざる尽力にあずかりそして予の渡米の債主矢野美造なる人の望みに応じ、彼を大工の内に住み込ませて、予は再び、五六十哩あるボノマと云える所に在る宿屋兼酒屋へ雇われて行つた、一カ月二十弗の月給にて労働の急激なことにサンラフエルの其に劣らざるも、身体強健にて、而かも既に多少の経験を有せし故に、左程の苦痛も感ぜなかつた。此宿屋は山中に在りて、ハンタースの遊獵の往復の途次に止宿する為と近在の農家の便宜の為に設けられたものであつて、見渡す所一面の山野、三四の農家以外は牧場と山林、全く山間僻地である。約二カ月位すると、前記の矢野美造なる者より報じて、歸国する故に面会したいと云うて來た。それで予は此家を辭して桑

港に歸った。

★

——『渡米案内』は——小冊子ながら予にとっては——労働の記念塔——である。古ぼけた頁を繰って行くと苦しい楽しい錯雑した追憶が胸一杯に拡がる。アイルランド人の宿屋の妻君が非常に働き手であったことも、予の記憶に鮮やかであった。毎日クツクをする、月曜には洗濯をする、客の扱いに出る、何んでも彼でも妻君が切り廻わしている。予が不馴れのために仕事が始まらないと、妻君は傍らで火のしの手をも休めず、大枚二十弗の月給を取り乍ら、そんなに鈍くては駄目だと口汚たなく予の後ろから浴びせ掛ける、予は殆んど堪えられぬ思いがして熱汗をタラタラ流して自から奮発した、時に白衣を火のしで焦がすと妻君の怒声が容赦なく予の頭上に爆発する。

一番苦しいのは月曜日の仕事である。朝は四時頃から床を蹴って起きる、洗濯をする、洗濯物は洗っても洗っても後から続いた。午後三時頃になるとさすがに忍耐を誇りとする予も参る、普通の日でも起床が五時、夜の仕事を終えてベットへ下がるのが十時、寝るのは僅々七時間であって、それでもナショナルリーダーの第四巻を読まんとして、字引と首引きしたのであるが一向に進境しない。此の宿屋には離れ家があつて、そこにも客が居た。前には広い庭が開けていた、庭には熟し切った懸鉤子が黒々と光っていた、予はよく之を切ることを命ぜられた。此の時ばかりは実に愉快を感じた。甘まそうなの

は予の口へ放り込み、籠にはクズばかりを入れておいた。しかし籠が一杯になるより予の腹の方の前に一杯になった、地獄で仏とは此の時のことであらう。

それから桑港に歸ると矢野は既に待ち受けていた。矢野は予の所持金を捲き上げるつもりで態々予を働き口から呼び返えたのであった。が、愚鈍な予はそれをすら悟らず、矢野の帰国に色々と骨折った。当時予の友人に石川という人造林檎酒醸造会社に働いている男が居た。石川は賢しきく、馬車の御者から醸造の手伝いをして出世した男である。予は自分で瓶を買って彼れから一ガロン余のサイダーを貰い、それを矢野に与えた、その頃の思い出の糸を手繰ると、予は憤怒の禁じ難いものがある。予はその人を責め無い、其の金を惜しまない、『渡米案内』には斯う書いてある。

此の送別の際、予は矢野に米賃六十弗を託した。内三十弗は、此帰国に際し入用なりとの事で之を貸し与え、残金三十弗は予が貧乏なる国元の老母へ送金し呉られるよう態々と矢野に依頼した(矢野は帰国の友に閑屋某があつた。閑屋は柴田某と共に、例の一番なる桑港第一の日本雜貨店に働いて居たのであつた、矢野と閑屋とは帰国後宿屋を営業するとか何とか云つて居つた、然るに矢野よりは横浜より安着の一片のハガキを送りたるのみ、亦一信なく、該金六十弗と共に行衛知れずとなつた。予は敢て該六十金を惜む者でない、矢野が斯くまでも不徳に墮落し果てたるを惜んだり、そして予が老母に

送りたる三十弗の金が矢野に横領されて届かざりしは百年の遺憾なるを地団太踏んだ。これ予の渡米後、嘗めたる第一の苦い経験である、此外は金十五弗を在桑人新井某に貸し、遂に取られたり、(約束の期日に至り、新井某云く、私う考えて持つて来たがパンツのポケットに穴があつて失うたりと、当時新井某は賭博と女買に耽つて居たことを発見して、予は再び催促せず、後屢々彼を見たが何時も風体良からず墮落の極底に沈みつゝあるのを見た)。しかし、斯数十の金は、予に貴重なる一事を教えた、他でない、予は爾後一切交際せざるの良策なることを、殊に金銭上に於ては決して何人とも関係してはならないことを、之れが為めに予は却つて多くの良友を得たるも、予は常に孤独の身を持つて異郷に行き又学問するを勤めた。

★

矢野は、かくてゴールデン湾頭の白波を濁して立った。そこで予は又もや職を失つたのであるが、桑港に踏み止まつて猶太人の家庭に働くこととなつた。仕事はあまり困難でなく、又やかましい家でもなかつたが、約一週間ばかりすると、或る夜の出来事である。客間の柱時計が無くなつた。疑いは予の頭上に落ちた、予はもとより言葉がよく通じないから予の足元を明るくすることが出来ない。猶太人の主人にしても直接予が盗んだとまでは疑いを深くした訳でもなからう。予が戸締を充分にしなかつたためか、予が他所から他人を連れ込んで盗ませたとでも疑つて見たものか、其の日から働くことを

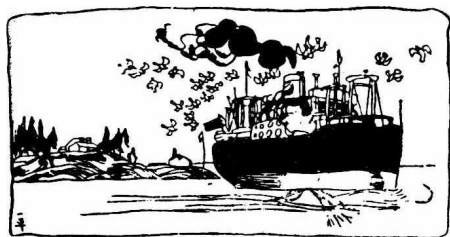
拒んだ。予は又もや街路へ投げ出された。街路に迷い、鼻を鳴らす犬のように、予は神経を尖らせて仕事を探かし歩いた。恰度そのとき犬が棒に突き当たったように予は見知り越しの或る日本人に出逢った。此の人はアラメダから帰ったのである、月の給金二十五弗でクックをしていたがあまり良い口でもないから止めて来たところ日本人は云った。『其の口を僕に呉れる』『僕を連れて行って紹介してくれ』と予は頼んだ、そのかわり五弗をやることにして其の晩彼れとアラメダに行き主婦に掛け合い、予はクックが充分出来ないから二十弗で好い、是非使ってくれと頼むと主婦は快諾した。今度の主人はジョー・プラムマと云って船舶に食料品を供給することを仕事にしていた、プラムマは毎朝桑港へ通っていた。若夫婦に子供三人、子守女一人の家族であつて、予は馴れない手付きでクックの稽古を始めた、が味が悪くとも、少々の失敗があつても、前のクックより五弗安いのだから、主人は苦情を云わない、妻君は予に教えてくれようとしたが、妻君自からもよく知らないが為めに、時には二人してケチンの破れるような大騒ぎをやりながらクックしたこともあつた。

子守女はアイルランド人でスカイラークの近郷に住んだものと云っていた。寝床を整え、子供の食事を調理し、守りをするのが彼の女の毎日の仕事であつた。予は主人等の食後独りポツネンとケチンで食つた。月曜には洗濯をする、それを週間に火のしを掛ける、日曜には大概

来客で賑わつた。かくて一年の月日が流れて行つた。長いようで短く、短いようで長くも感じたアラメダの生活に於て、予の一身の方針に向つて、多大の影響を及ぼしたことが一つある。それは予にとつて、今も強い記憶を残す耶蘇教の生活がそれである、渡米した頃の予そのものは、山出しの男であり、愚鈍であり、朴訥であつた。随分と在桑日本人学生から馬鹿にされたものである。予はあまりに其れを知り過ぎていた。

陸だ！ 陸だ！

岡本 一平



日本を出て九日目の朝である。船が急に静かになつたので船室の辛うじて首の大きな丸き窓に開いてる窓から顔を出して見た。陸だ！ 陸だ！ コロンブスが亜米利加を発見した時の喜びがどの位なものでこの朝漸く判つた。眼の前に數の多い岩の岬角が突出している。油絵の掛額で馴染の枝が垂れ下り尖のものがった木が生えてる。赤い屋根の建物。白灰色の海鳥が船に群る。舷側の海に長大な根の海藻が浮いてる。ここはビクトリア湾の入口。

アラメダの追憶

アラメダには桑港から十六分ばかりで達する。蒸汽船が織るように通っている。桑港市外の住居地として桑港や王府の発展をよそに、昔の姿でアラメダは残っている。アラメダの追憶は予にとつてなつかしいものの一つである。クックの初稽古もアラメダなら、英語の手ほどきもアラメダであり、天の一角に耶蘇を発見したのもアラメダである。宗教方面に予の知識欲を開いたのもアラメダである。其の頃アラメダに居た人で少しく名を挙げたのは神田佐一郎というユニテリアンの日本への輸入者である。今は紀州へ引込んで銀行屋で納まっていると聞いた。神田は有名なマイザー佐治突然坊主の親友であつた。青森県人の佐藤という男は帰朝後青森の県会議長になつた。日光中禅寺湖畔にホテルを開いている酒巻正太郎も仲間であつて、桑港ケチン奉公帰朝者の成功者と目される。其他神田神保町で家具屋をしている服部も同じくアラメダの産である。

*

予の主人ジョー・ラウマー氏は、桑港の膨脹と共に発展して今は問屋業を営んでいる。山出しの朴訥漢の予は、支那ミッシェンの厄介になつて英語を習い始めた。グッドモーニングの程度であつた。ミッシェンの主婦フレイザー

はデブブリと肥った親切な婦人であつた。茲に閑居していたホイト博士（八十ばかりの爺さん）は幽霊のように瘦せ細った娘を持っていた。瘦せた娘は日本人に親切であつた。ホイト博士は曾てテンネッシー州のメリーヴィル大学の教授であつた縁故から、予は幽霊のような女史から書を買つて、其の後になりテンネッシー州へ旅立った。これは千八百八十八年の春であつた。其の前に予が既に耶蘇の信者であつたことは云うまでもあるまい。予は教会に属するに当り、順序より云えば長老教会へ這入るのが当然であつたが、予は特に好んで組合に属した。組合には学校が多くあり、組合派に属する学者も多かったからである。神田佐一郎氏の斡旋でアラメダの第一組合教会に属していた。予は耶蘇教徒になつても熱したこともなく、冷めたこともなかつた。マンドヴァー神学校に学んだときには聖書をハツ裂きにして研究もしたが、耶蘇に対して變つた感情も持たなかつた。最初から予は耶蘇を神と思わなかつたからでもある。しかし耶蘇の生涯は予に幾多の感激と力を与えている。静寂なアラメダにも時には嵐があつた。長州人の高橋欽太という友人があつた。もう一人山脇という数学の名人で鉄道院に奉職した立派な男も居た、がそこに波紋が渦巻いた、——その渦巻き——。僕は、井深博士の妻君の行動を潔白だと云い切ることが出来なかつた。それは山脇を予がよく知っていたが為めでもある。しかし、その事はノースフィールドで、今の井深博士夫人当時の山脇夫人との会談の機

会に譲つて、茲ではアラメダの生活を急いで、王府ホブキンス・アカデミー入学のことに及び度い。予の方針は先ず金を貯めて、それから学校生活をするという点に目標をおいていた。従つてスクールボーイを望まず、いつもハードウオークにぶつかつて行つた。貯金も四五百弗に達した。しかし其れ以上は容易にたまりそうもない。少し英語が解つてきたので勉強がしたくて矢も楯も耐らない。そこで方針を変えて、学校生活することになり、教会の牧師スカッター氏の紹介で、ホブキンス・アカデミーに入學した。恰度明治三十年一月のことであつた。予の瞳は希望に燃え、予の胸は歡喜に波打つた、『渡米案内』には斯う書いてある。

アラメダ市の隣りなるオークランド市に在るホブキンス・アカデミーに入學した。予が自活の労働は一日三回校長の一家族の食事の給仕を爲すにあつた。ホブキンス・アカデミーは組合教会派に属する中学校にして特に大学予備校として設けられたものだ。であるから生徒は多くは資産ある家の子弟だ、予が入學したのは一月にして学年の途中であつた。予は英文典、修辭学、代数、希臘語及び羅典語を同時に始めた。予の英語力は云えば微々たるもの僅かにアラメダ支那ミッションの夜校で数カ月学びたるに止まる。大胆と云えば大胆、乱暴と云えば乱暴である、予は当時身体強健なりし故、専心一意學問に従事した、そして学年の終りには予が当期研究せしすべての科目を及第した、夏季休暇には再びアラメダに來たりて、一週三弗五十仙に

て労働に従事した。そして秋季の學業始まるや、予は再びホブキンス・アカデミーに歸つて、學年を始めた、當時同校に一人の日本人で九州熊本の人犬野某があつた、彼は昨年卒業した根本正（少年禁酒専門の根本正）の後に來り、同一給仕をして勉強を爲しつゝあつた。此外に太平洋神學校（アカデミーの隣り）に今一人の日本人神學生小崎成章（有名な小崎弘道の令弟）も在學した。この学期始めに予がアラメダにて交友をなした、高橋欽太（後年東京青年会の幹事）を校長に紹介して入學せしめた。

予や頑愚にして交際を知らず、故に生徒間殆んど一人の交がない、予は日夜勉強に怠りなく孜々としてグリキ及びラテンのルーツを研鑽した。然るに彼等生徒は予を愚弄するにケターの異名を以てした、英語でケターは猫だ。そして予が名を英語にて綴れば片はケターなり、故に彼等生徒は戯れに予を猫視して頻りに予を呼ぶにケターケターを以て予をなぶつた。予は朴訥にして彼等青年をあしらうの術を知らず、彼等の無礼を怒る、怒れば怒る程一層ケター……を浴せかけた。予は日々の課業を忠実に爲したるに、交際もせず、又彼等と少しも談笑を交えざりし故に彼等はよいことにして予を益々愚弄し、嘲罵するに至つた、然れども、予の言語は尚不完全、且つ不自由であつたから弁論を以て彼等に抗することは出来ない、時には腕力に訴えて彼等の蔑辱に酬いたことがあつた。されど多勢の彼等は益々予を愚弄して已まない。予は終に断然同年十二月の休暇を期として同校を

辭し去った。然るに予は當時既に予が貯蓄せる資金を使い果し、囊中殆んど一金を余さず、予は直ちにクツクの仕事を求め桑港を去る。数十哩のロースゲトスと云う一小村のホテルに行き、クツクとなり、一日一弗の給金を得た。当地は當時、尚お依然たる田舎村にして別に見るべきものなく、又日本人も居らず、只一人の邦人農夫働き居れり、彼の名は一ノ井正典と云い、村老の言を信じて營々として働く。彼は曰く此村老はスタンフォードの友人だ、今にスタンフォードが大学校を設立したらば頼んで入学させてやると之を頼みに今精々働いていと。此一ノ井正典は後年齒科医となり帰朝して神田辺にて開業して居る。

(明治十七年)

桑港の滯留

末広 鉄腸

此処は大なる棧橋にて上に屋根あり。一町余も海上に突出せり。去れども其の建築は粗末千万にて掃除も行届かず、塵埃諸方に山を成せり。今や上等客二十余人の荷物を一時に其の処に投げ上げ、船客は我れ先きと自分の荷物を取集むれば、其混雑一方ならず。税関の役人多人数出で来り、山の如く積み重ねし荷物の間に立つて調査を始めたり。紳士は茲が兼て或る人より聞き置きし手段を施す場所と思ひ、目をキョロキョロとして四方を見渡すに、上役とも思ひき黒羅紗の「コート」に真鍮の錠を付けた男は「ベン」を耳に挿み、手に許多の紙面を携えて中央に控ゆれば、埃だらけになりし粗末の服を着したる男が頻りに持主に「カバン」を開かせては中にある品を取り出して調査を為し、甲の荷物は一寸と中を覗いて見るばかりなれども、乙の荷物は底まで叩き振うて改める様子なれば、紳士はさてこそと思ひ、独り心に笑みを含み乍ら、上陸のときに洋服の隠しに「メキシコ」銀三四弗を入れ置きしが、ポケットに手を差

し入れ、順番の来るのを待つ処へ、調査掛りの男がツカツカ側へ寄りしかば、此処が機会と思ひ、人に見えぬ様に二弗ばかり掴んで差出せば、其の男は黙って手に握り、ズボンの隠しに納め乍ら、向うの方へ往きて他人の荷物の調べに掛りたり。紳士は少しく失望しキョロキョロ四方を見廻す処へ、又一人の調査掛りが前に来りしに因り、今度こそ間違があるまじと再び二弗掴ませしに、此の男は紳士に向い「カバン」を開けと手真似にて示したれば、錠を取出して錠を開きに掛る処へ、此男も上役に呼び立てられ何処かへ立ち去り、程なく穢き衣裳を着て面相の悪しき男が出で来り、懇々調べを始めしが、此時紳士の「ポケット」にある銀貨は已に無くなり、大勢の見て居る前で錢入れの中より銀貨を取り出すことは些と極りが悪く、其上少し許りの海關税を出さぬ為め幾人にも金を与えては差引き算用に合わぬと思ひ、渋き顔を為して荷物の側に突立てば、調査掛りは衣裳や書物を翻り返して細かに中を改め箱に入れたる帛物や細工ものは一々蓋を明け紙に包みし細き品まで尽く叩き出したり。最後に一ツの渋紙に巻きしものを取出だせしが、是れは或人より頼まれ倫敦へ持参する品にて、紳士も中に在るものは定めて大きな写真ならん、左も無くば絵図の類ならんと思うて預り置きしが、今日の前にて封を解けば如何にも立派なる西陣の織物が五枚ありて紅紫爛漫として目を驚かす許りなり。元來米国にて帛類に四割半の海關税を掛けることは紳士も人から伝え聞きしが、こんな品物を托せ

られしとは夢にも知らず。最初横浜を發するとき所持金は皆んな正金銀行に頼んで為替に組み、船中の用意として米金三十弗ばかりを携え、是の内も船中にて酒代や其外の入費に遣い払い残り少なくなりし処なれば、今此有様を見て吃驚せしが、調査掛りは善き品物を見付けたり、定めて長官の御着に預からんと思ひし様子にて、如何にも得意そうなる顔色にて、紳士の所持品を小間物見世の様に地上に羅列し上役に通知したり。然るに上役は些し寛大の男と見え一寸品物を一見せしのみにて別に八日間敷調査を為さず、紳士の差出し置きたる荷物の書付に照らして税金十弗を取り立てることを命じられたれば、紳士は「ボケット」を叩き振りヤット十弗の金を集めて役人に渡し是れで済んだは先ず仕合せと思ひホット一息。

紳士の荷物は大きな武ツの皮箱にて、東京を發する時に三人も掛り工合よく次第を立てて品物を入れ置きしが、今ムチャクチャに引張り出されしことなれば元の様に取り取めんとすれども容易に始末が付かず、二三十分も掛ってドウカウカ片付て四方を見れば、一同に上陸せし船客は早や大方此処を立ち去り、跡に残るは僅かに二三人に過ぎず。紳士は船中にて西洋人などに桑港の様子を聞き、名高き「パレスホテル」に投宿する積りなれば、皮箱は皆な税関まで出迎いに來りし全様のものに預け置き、其処にて客を待ち居たる馬車に飛び乗れば、船中にて度々出逢うて懇意になりし魔尼羅の紳士も已に車上にあり、此の紳士は英語がよく出来其上

久しく我国に居りたれば、不規則ながら日本語を話し、紳士の為めに此上もなき全行なり。車上に於て税関のことなど話し合うに、魔尼羅の紳士も許多の帛物や金銀細工を日本にて買求め荷物の中に入れ置きしかど調査は至て寛大にて、一文も税金を取られぬと云うに因り、役人に賄賂を与えしかと問うに、左様な馬鹿げたことはせぬと答えたり。紳士は益々不審が晴れず、再三思考するに、最初二人の調査掛に金を遣りしことを跡の男が知つて、自分に賄賂を貰わぬのを不平に思ひ悪く荷物をまぜ返せしならんと、初めて気が付き、四弗散財して十弗の税金を取られしは人に話されぬ失策なりと、独り笑う内に、馬車は早やガラガラと「パレスホテル」の門内に馳せ入りたり。

サンフランシスコはカリフォルニア州の中央市府にて、米国泰平洋海岸の一大都会なり。此の地は今より四十年前までは誠に狹隘なる一市街なりしが、カリフォルニア金山の発見ありし以來漸次に繁昌となり、今は市街の広き長さ三哩にて、幅は六哩あり。丘阜起伏して土地平坦ならず、人家其の間に櫛比し、殊に「マアケットストリート」と唱うるは中央の大道にて、馬車の往来する宛から織るが如く、建て列ぶ家屋は孰れも五層六層にて、其美麗なること喩うるにものなし。「パレスホテル」は一際勝れし大建築にして家の広き四方一町ばかりにて、巍々として雲表に立つ八層の高樓なり。紳士は馬車に乗て「ホテル」の門内に入り、其の壮大なるに胆を潰し、キョロキョロするのみにて言語をも發

する能わず。魔尼羅紳士を通弁に頼んで店の事務官に掛け合い、一日四弗にて一ツの部屋を借りことに相談を極めて鍵を受け取れば、小使が出で來たり、二人の手荷物を携えて庭の隅にある小き一室に案内せり。紳士は四方を見廻すに左右に小き腰掛があるのみにて、普通の部屋とも思われず。又一ツの階子も無ければ、上の方に登る通路とも見えず。心に不審は晴れねども、黙て其の処に立つて居たるに、一人の男が五六条も吊下したる繩の一ツを取り、力に任せて之を引けば、此室は忽ち地上を離れブラブラと天井に上れり。紳士は始めて兼てより洋行歸りの人から聞きしことのある吊台にてありしかと、気が付きたり。此の吊台は三階に至つて止まり、小使は戸を開いて二人を案内し、隧道の如き処に入り、二百三十号と記したる室の戸を鍵にて捻明けて紳士を其の内に誘い、魔尼羅紳士を隣室に入れた。紳士の室は広さ十畳もあるべく、中央に大いなる臥台を置き、左右には四五脚の椅子を列べ、天井より瓦斯灯を吊下し、左右の壁には大いなる姿見の鏡を掛けたり。次の間にはセメントにて造れる洗手盤あり。二つの鉄管にて水と湯を注射する仕掛となし、外の一間は卵形を為す湯槽ありて左右に鉄管を設け、其の口の処にある小き鍵を捻れば、一方よりは冷水を流出し、一方よりは熱湯を注射す。其の側は便処なり。紳士は一通り室内を点検し、湯を遣い荷物を片付ける中に早や夕景となれば、魔尼羅の紳士と俱に旅館を出でて市上を散歩するに、瓦斯灯は電気灯と相映じて不夜